

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2
5. 政治神学2——アガンベン
6. 政治神学3——ジジェク
7. 研究発表
8. 研究発表
9. 研究発表
10. 解放の神学3——黒人神学
11. 解放の神学4——アジア
12. 宗教の神学とヒック 1/9
13. エコロジーの神学 1/16：レポート提出（締めきり）

<前回>黒人神学**（1）解放の神学とその多様性**

2. ラテン・アメリカの政治的解放の神学（カトリック教会）、フェミニスト神学、黒人神学、アジアの解放の神学（民衆の神学など）。

解放の神学の多様性は、現代における「罪＝抑圧」現象の多様性に対応している。

民族・人種、政治・経済、ジェンダー・文化

「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由の身分もなく、男も女もありません。」（ガラテヤ3:28）

（2）黒人神学と社会的構想力

3. コーン『抑圧された者の神』新教出版社。

はじめに

「私は黒人神学の知的基盤を論じ、被抑圧者に対する神の解放に終始しないような、いかなる福音分析も「それ自身」非キリスト教的であることを、神学的に明らかにしようと努めてきた。」(1)

「すべての神学は特殊なものであり、したがって、その特殊性によって限界づけられているが、所与の特殊性が指示している真理は限界づけられていない。」

I 序論

「私の論点は、われわれの社会的・歴史的文脈は、ただわれわれが神に語りかける問いだけでなく、その問いに対して与えられる答えの態様ないし形式をも決定する、ということである。」(39)

II 真理を語る

「黒人経験の神学的機能を探究すること」

神学の資料としての黒人経験

「黒人神学は、黒人経験の構造と形式を明らかにしなければならない。なぜならば、解釈の諸範疇は、黒人経験それ自体の思考形式から生起してくるものであるからである。」(42)

「このような黒人的経験に含まれるものは、動物物語、民話、奴隷の俗歌、ブルース、個人的経験の記録等である。」(51)

「われわれ黒人神学者たちは、真理を「語る」ためには、黒人性についての真正の経験を提示しなければならない。」(60)

黒人経験・聖書・イエス・キリスト

「黒人神学の資料としての黒人経験は、伝統的なキリスト教神学の資料として同定されている聖書に対して、どのように関係づけられるのであろうか」(60)

「黒人神学を単に黒人の文化史に解消してしまうことを防いでいるのは、この超越性の肯定なのである」「黒人経験は聖書が黒人神学の一資料であることを要求しているのである。」(61)

「黒人神学が西欧キリスト教の伝統と歴史を無視してよい、ということの意味するものではない。それはただ、その伝統についてのわれわれの研究は、黒人によって解釈されたような仕方での、聖書に啓示されたみ言葉の理解の光に照らして遂行されなければならない、ということの意味しているのである。」(62)

「人間経験における共通要素」(63)

「イエス・キリストは、黒人の希望と夢の内容であるゆえに、黒人神学の主題である。」(63)

「黒人性と神性とは、一つの現実性として弁証法的に結合されるのである。」(68)

V 黒人神学とイデオロギー

「神学がそれについて語る、神的啓示は、人間的経験から引き出した、言語学的諸定式に閉じ込めてしまうことはできない。したがって、自らの思惟範疇の有限性を受容しようとせず、あたかも自分が全真理、しかも真理のみを知っているかのように語る、いかなる神学も、神冒瀆、つまり、神的真理のイデオロギー的歪曲の罪を犯すのである。」(146)

「キリスト教神学者とは、それゆえ、社会的実存と神的啓示との微妙な均衡関係に固着しつつ、福音解釈へのその解釈学的意識が、被抑圧者の自由の闘いによって、規定されている人のことである。」(148)

「真の検証は、われわれが、自由のための歴史的闘争において、同じ側につくように導かれるか否かに、かかっている。」(153)

「客観的に証明する」方法は何もない」(153)

「だが、このような譲歩は、無制限的な相対性を肯定するものではない」、「超主観的な「何事か」は、物語において言い表わされるし、事実、物語において具体化されているのである。」(154)

「すべての民族は、語るべき物語、すなわち、彼らが自分の存在理由を規定し、かつ肯定する際に、自分自身と子孫たちと世界に向かって、自分たちがいかに考え、いかに生きているかについて、語るべきなにかを持っている。物語は、無から有へ、非存在から存在へと移行する、奇跡を言い表わし、かつそれに参与するものである。」(154)

「彼の物語は、われらと共にいたもう、彼の臨在の恵みによって可能とされる信仰を通して、われわれの物語となるのである。」(156)

「われわれ自身の物語がイデオロギー的になる、つまり、真理を聞くことを不可能にする閉じられた体系になるのは、われわれが、他の物語を聞かなくなった時である。」(158)

1 1 . 解放の神学 4 —— アジア

(1) アジアの神学

1. 欧米神学の受容・紹介
2. 近代化の文脈における土着化と解放というテーマ。

(2) 民衆の神学

李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編
『民衆の神学』教文館、1984年。

監修のことば (李仁夏)

序文（木田献一）

1. 韓国における民衆と神学——アジア神学協議会についての伝記的報告（徐洸善）
2. 韓国仮面劇に対する神学的考察（玄永學）
3. 恨の形象化とその神学的考察（徐南同）
4. 民衆の視点から見た韓国キリスト教史概略（朱在鏞）
5. 民衆のメシア運動としての韓国キリスト教（金容福）
6. 旧約聖書の民衆理解（文熹錫）
7. マルコ福音書におけるイエスと民衆（安炳茂）
8. 二つの物語の合流（徐南同）
9. メシアと民衆——政治的メシア主義に対峙するメシア的政治の追求（金容福）

補論 一九七〇年代における韓国神学の展開（徐洸善）

筆者紹介

あとがき（蔵田雅彦）

（3）発端あるいは文脈

「民衆の神学は、一九七〇年代の韓国の民衆の自由を求める闘いの中で形を形成してきたことは事実である」（1）、「しかし、その根は決して浅いところはない」、「韓国教会の一〇〇年に及ぶ歴史を読めば読む程に、信仰理解は伝統的に保守的でありながら、宣教の当初から日帝の植民地支配の抑圧からの解放の希求と闘いの歴史的な脈の中で福音のメッセージを聞いてきたことがわかる。」（李仁夏、2）

「民衆の神学」は韓国のキリスト者を中心とする民主化闘争から生まれてきた神学である。そのことは、一九七六年三月一日に出された「民主救国宣言」の署名者たちが、同時に「民衆の神学」の中心的指導者であることに端的に示されている。（木田献一、2）

（4）韓国民衆史の中で

・「韓国における民衆と神学——アジア神学協議会についての伝記的報告」（徐洸善）

「徐南同はその「二つの物語の合流」についての論文において、現在の民衆の神学は、現在に対して歴史のパラダイムを提供している、以前の歴史の続きなのだと論じている」

「（一九一九年の）三・一独立運動」「（一九六〇年の）四・一九（学生）革命」「今日の韓国人が、自らの主体性をはっきりさせるとき、東学運動—独立運動—三・一運動—四・一九革命という系譜を自分たちの民衆運動の系譜として述べること」（30）

「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」（32）

「徐が観察しているように、「儒教の厳しい女性差別強要のもとでは、女性の存在は恨そのものである」、「恨は韓国女性の伝記や物語、小説、詩、劇等に避けがたく現われてくる、心理・社会的用語である」（33）

「民衆の外国勢力によって束縛されてきたことを自覚しながら、しかも民族独立の感情を押さえなければならぬ時に、恨の感情は心理的・政治的怒り、挫折感、憤りの次元へと高まっていく。恨は個人的心理の次元と共に社会的・政治的次元における自覚である。」（34）

「抑圧された民衆の集合的恨の堆積から産み出される積極的要素」（35）

「徐は彼の論文において、恨を描いている韓国の仮面劇について、生への目的を粘り強く探求している民衆劇として言及している」（35-36）

・「韓国仮面劇に対する神学的一考察」(玄永學)

「仮面劇の起源は昔の村祭りである」、「村人たちは一年の豊作を神々に願ってさまざまな宗教的儀式を行なう」、「徐々に貴族に対する風刺の描写を加えていった」、「神の霊を鎮めるために演じられた村落の儀式は、抑圧された庶民すなわち民衆の劇へと変わっていき、それをとおして民衆が彼らの抑圧者を揶揄し、またそのことによって批判するようになった」(57)

「踊りの動きは、上品で優雅な貴族の踊りに比べると、躍動感に溢れ、大胆である。仮面劇は、ユーモアや風刺、多くの性的な野卑な言葉に満ちている。仮面劇は、多くの即興と無秩序を伴う劇であり、祭りである。もともと、仮面は神々を表わしていた。しかしながら、仮面劇の仮面は、演者が演じる人物を表わしているにすぎない。仮面はまた、人々を夢と幻想と空想の世界に導き入れる。」

「仮面劇は一一の場面より成り立っている」(58)

「老丈(老僧)の場面」

「チバリという遊び人が登場する。チバリは老僧を打ち負かし、金の力で若い女性の愛情を買ってしまう」

「この老僧は老衰した精神性と、この世から遊離し、非生産的になった形而上的な宗教を代表している。以上のように、いわゆる「高尚な」宗教のもつ価値観と指導性が、冗談と風刺と笑いの対象となっているのである」(59)

「三人の両班(支配階級)の場面」

「両班階級は支配者であり、エリートである。彼らは学問を積み、尊敬されているが」(60)、「現実の世界に対しては盲目にならざるをえない」、「観衆は、両班とは反対にすべてを聞き取り、理解するのである。彼らは心から笑う。現実を知るマルトゥギは、状況を大げさに表現し、貴族を風刺することで体制の矛盾を暴露するのである」(61)

「ミヤル・ハルミ(老女ミヤル)の場面」

「観客である民衆は、この悲しい物語に自分も参加する思いである。これがこの世での彼らの運命である。貴族の支配する世界では、飢餓、離別、搾取、殴打などで苦しむのは民衆である。いわゆる宗教の救済もない」、「このうんざりする世界における唯一の慰めである宗教も笑うべき対象なのである。世界全体が笑うべき対象なのである。演者と観客の両者は、泣くと同時に笑うのである」、「場面の最後は仮面劇全体の終わりであるのだが、そこで村の長老の「子供たち、起きなさい! 夜明けが東と南の空から近づいて来る」という言葉がよくつけ加えられる。夢と幻想の時は終わったのである。人々は皆、日常の世界へもどらねばならない。」(62)

「仮面劇を通して庶民である民衆は、この世に対する批判的超越を経験し、また表現する。そしてこの世の不条理を笑い飛ばすのである」(62)

「民衆は、支配者も指導者もこの世に対する妄想のためや、この世から切り離されているために見出すことができない世界の現実を正しく把握するばかりでなく、この世に対置し、またこの世を超越した、支配者と指導者が発見することが不可能な、もうひとつの現実を心に描くのである」(63)

「民衆は意識化され、批判的超越の姿勢をもつようになるのである。換言すると、批判的超越の姿勢は、民衆の日常生活における抑圧された感情の集積の結果生まれるのである。そして、そのうっ積した恨」「は解き放されるのである」(64)

(5) 聖書の文脈で

・「マルコ福音書におけるイエスと民衆」(安炳茂)

「イエスはどのような人々に対して語ったのか、また、彼が語った内容の性格は何であったのか。のように問うことは、イエスのことばの歴史的特質を明らかにするであろう。イ

イエスが語りかけた人々の社会的性格を明らかにするためには、その民衆の経済的・政治的・文化的な構成を探らなければならない。この主題をより包括的に把握するためには、イエスをとりまいていた民衆の社会構造全体と立場を知ることが必要である」

「マルコ福音書は、最初からイエスをとりまく群衆について語っている」（229）

「マルコ福音書では、指示代名詞を勘定にいれないで、オクロスという語が三六回出てくる」（230）

「マルコの時代、ユダヤ民族は、ユダヤ人キリスト者も含めて、彼らの国土から追放され、羊飼いのいない迷える羊のように放浪の身であった」（233）

「これらの民衆は、いわゆる罪人であり、その社会では断罪されていたのである」、「いくつかの場面では、これらの民衆（オクロス）は、弟子たちと区別される」、「イエスが、「オクロス」を非難した場面は一度もない」、「オクロス」は、イエスを敵として攻撃したエルサレムからの支配階級の人々と対照されるものである」（234）、「オクロス」が支配者と対立しているがゆえに、支配者たちは彼らを恐れ、彼らの怒りを引き起こさないように努めていた」、「彼らはあやつられやすい人々であった」（235）

「オクロス」に対するイエスの姿勢は一貫している。彼は無条件に彼らを受け入れ、支持している。彼はありのままの彼らを受けいれている。彼はまた彼らに将来（神の国）を約束している。このような行動は、パリサイ派やサドカイ派など指導的立場の人々だけでなく、エッセネ派や洗礼者ヨハネの弟子たちのような反エルサレム的な宗教集団にとっても容認し難いものであった」（237）

「イエスがそれについて語った民衆は多様性を持っていた」（238）

「罪人（ハマルトーロス）」「取税人」「病人」

「新約聖書に「オクロス」という用語を導入したのはマルコであり、また彼がイエスにつき従い、イエスが特別に愛した人々を「オクロス」とみなしたのである」、「我々は「ミンジュン」の意味をマルコがどのように理解したかを発見できるであろう」（250）

「ラオス」「ユダヤ教の用法に導入したのは七十人訳で、ヘブル語の「アム」「イスラエル民族を指す」、「イスラエル以外の民族には、ほとんどの場合「エスノス」が使われている」（250）

「オクロス」「ギリシア語文書では無秩序な大衆か、あるいは軍隊の一般兵卒たち」「無名の民衆は、支配階級とは区別されている」（251）

「アム・ハー・アレツ」「紀元前一世紀初頭の日常の用法」、「この言葉は軽蔑語となり、宗教的、民族的いずれの意味においても「その地の民」として」（251）「民衆の下層の人々を指す用語となり」、「マルコは、「アム・ハー・アレツ」を指す言葉として当時否定的な意味で使われていた「オクロス」という言葉を選び、当時の社会の犠牲者を明らかにする背景としてガラテヤをとりあげたのである」（255）

「イエスは「オクロス」に加担し、無条件にあるがままに彼らを受容する」、「イエスが「オクロス」をひとつの勢力に組織化しようとしたという印象はない」「イエスと「ミンジュン」との関係は成立したり破れたりした。彼らは無条件にイエスにつき従った。彼らはイエスを歓迎した。そしてまた彼らはイエスを裏切りもしたのである」（256-257）、「イエスは「ミンジュン」に神の国の到来を告知したのである」、「イエスは「ミンジュン」の側に立ち、彼らに神のうりにある未来を約束した」（257）。

（6）二つの物語の合流

・「二つの物語の合流」（徐南同）

「キリスト教の民衆伝統と韓国の民衆伝統との合流」、「韓国の民衆神学の課題は、基督教の民衆伝統と韓国の民衆伝統が、現在韓国教会の＜神の宣教＞活動において合流していることを証言することである。現在目の前に展開している事実と出来事を、＜神の歴史介

入>、聖霊の歴史、出エジプトの出来事とであると知ってそれに参与し、それを神学的に解釈する仕事である」(307)

「金芝河の民衆神学」「張日譚」の構想メモ」(308)

(7) 民衆の神学と日韓の交流

日本の聖書学研究の分野では、民衆の神学との交流が見られる。

- ・ 木田献一
- ・ 荒井献『イエスとその時代』岩波新書、1974年。
「あとがき」「地下にある韓国のキリスト者学生諸氏から私のもとに送られてきたメッセージ」
- ・ 大貫隆「マルコの民衆神学——安炳茂氏との対話」(富坂キリスト教センター編『民衆が時代を拓く 民衆神学をめぐる日韓の対話』新教出版社、143-211頁)

↓

マルコとパウロ、民衆伝承とケリュグマという論点

<参考文献>

1. 日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、1991年。
2. 森本あんり『アジア神学講義 グローバル化するコンテクストの神学』創文社、2004年。
3. Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.
, *Love Meets Wisdom. A Christian Experience of Buddhism*, Orbis, 1988.
, *Fire & Water. Basic Issues in Asian Buddhism and Christianity*, Orbis, 1996.
4. 柳東植『韓国のキリスト教』東京大学出版会、1987年。
5. 徐正敏『韓国キリスト教史概論——その出会いと葛藤』かんよう出版、2012年。
6. 李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984年。
7. CCA 都市農村宣教部編、キリスト教アジア資料センター訳
『民衆の神学をめざして』新教出版社、1983年。
(Urban Rural Mission Christian Conference of Asia, *Towards A Theology of People*, Hong-Kong, 1977.)
8. 富坂キリスト教センター編『民衆が時代を拓く 民衆神学をめぐる日韓の対話』新教出版社、1990年。
9. 安炳茂『民衆神学を語る』新教出版社、1992年。
10. 朴聖焮『民衆神学の形成と展開——一九七〇年代を中心に』新教出版社、1997年。
11. モルトマン『神学的思考の諸経験』(組織神学叢書6)新教出版社。
第三章「解放の神学の鏡像」第四節「支配階級にとっての民衆の神学」(308-330頁)